海外の話題

—インド紀行—

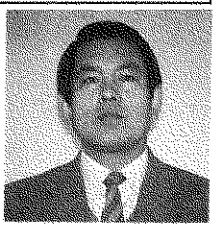
第14回 国際ガラス会議とその周辺

ニューデリー 1986.3.3～7

A Trip to India
——XIVth International Congress on Glass

Rikuo Ota
Kyoto Institute of Technology

京都工芸繊維大学・教授
大田 陸夫



●インド政府観光局（東京）へ電話

ガラス会議の1年近く前のこと、工業化学教室主任のH教授から入試問題委員を要請された。つい最近やったばかりだし、それに入試の頃には外国に出張しますからと言ったのが、インド旅行のふん切りになった。3年まえ1983年のハンブルグ国際ガラス会議のときは、東京のドイツ観光局に電話して、地図とホテルリストをとり寄せ、自分で手紙を書いてホテルを予約した。グリンデルバルトとパリについてもそうした。今回も同じことをしようと思った。ガイドブックを頼りに、東京のインド政府観光局へ電話した。ニューデリー、カルカッタ、ボンベイの地図とホテルリストを請求した。10日程して送られてきたのは、4つ折りのインド全図の地図2枚とカルカッタの市街図3枚、インド観光案内一冊と薄っぺらいホテルリストであった。

マレーシヤにも寄ろうと思った。UCLAにいた時に知り合ったホッペン氏が十数年来クリスマスカードに書いてくれていることである。2月末日の出発に間に合うように、早急にスケジュールを決める必要があった。ホッペン氏が3月中クアラルンプールに、又は少くともマレーシア国内にいるかどうかのきき合せの手紙を出したのは、クリスマスカードによって住所を確認してからのことであるから、12月半ばであった。返事は来なかった。律儀な彼のことだから手紙が着かなかったにちがいないと思った。1月になり、マレーシア訪問はあきらめて、その旨の手紙も送った。ついに彼から便りはなかった。インド国内の旅行もあきらめた。地図さえ手に入らないのだから、ホテルなど自分で予約できるどころではない。

近畿日本ツーリストのS氏がしばしばやって来た。ビザ申請に、教室名を英語で書かなければならないとき、分からないことが多いと言うので、京大公報英語版を一冊差上げた。欲しそうであったので、インドの地図も差上げた。タダでやるのはもったいない気がしたので、「何かいい情報あったら教えてよ」と言っておいた。

ビザの申請をしたのは、出発の50日前であった。インドは業務ビザの発行が遅いという。本国からの命令があれば問題ないが、そうでないといちいち本国に問い合わせるので間に合わない恐れもあるとS氏は言う。観光ビザなら1週間ですよ、と暗に観光ビザを勧めるようなことを言う。もしものことがあるといけないので、やはりその手には乗らないことにした。日本からの出席者は、会社を除くと大学からは東京3人（うち1人学生）、京都3人、岡山1人であった。2月に入って、インド領事館にきくと、本国からの指令は来ていないという。京大化研のS先生がインドICGへTelexを打とうとした。しかし、届かない。Circularに記載されたTelex番号がまちがっていたのである。もしも全員行かれなくなったら、それはそれでむしろホッとするだろうと皆内心思っていたにちがいない。やきもきしたのはツーリストのS氏だけだったであろう。

ビザが出ることが分ったのは出発の2日前であった。岡山大のM氏にいたっては、出発当日に大阪空港でであった。

●マルコス失脚直後のマニラ空港

2月28日（金）タイ航空TG621便は、定刻を少し遅れて、午前11時すぎ大阪空港を出発した。午

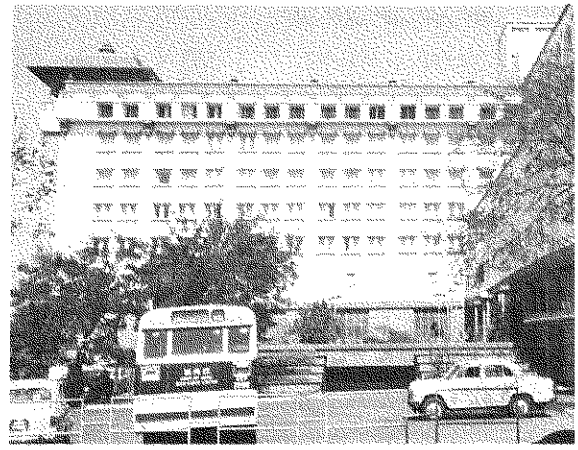
後2時35分マニラ空港に到着した。前日（27日）は失脚したマルコス元大統領が出国するに際し、マニラ空港は閉鎖されていた。マニラ空港の国際線ロビーは乗りつぐ人も少なく、みやげ物店がひとつあるだけである。トイレにはチップ目当ての若者がたむろしていた。ロビーにはコーヒーの出前サービス（有料）があり、トレイをもったウェイトレスが近づいてきた。

マニラから乗り込んだフィリピンの青年と隣り合せになった。妻子をおいて、サウジアラビアへ出かせぎに行くところだという。フィリピン人の英語の達者なことはマルコスvsアキノ大統領選の模様を伝えるテレビを見たおかげで、十分すぎるほど知らされたが、きいてみると6才から全て英語で授業をやるそうである。ベトナム上空に入ることを機長がアナウンスした。青々としたジャングルが広がっていた。かつてのダナン基地はこのあたりだったろうか。今は遠くなったベトナム戦争を思った。

午後5時10分、タイ・バンコックに着いた。マニラとうって変ったにぎやかさである。腕時計が故障して現地時間に合わせられなくなったので、12USドルでタイ製時計を買った。売子にカメラを向けると同僚の女の子達がヒヤカシの声を上げた。バンコックのダウンタウンまで出るには小一時間かかるし、空港税もとられるとあって、空港ロビーで6時間座っていた。往き来する人々を飽かずながめた。バンコクはタイ空港の本拠地だが、タイ航空は東南アジアでは最大の空港路線を誇る。エア・インディアなどは小さいものである。バンコックで乗りかえたロンドン行きタイ航空TG914便には、頭にターバンを着けたシーク教徒の姿が目についた。インド圏に近づいたという実感があった。

●深夜に発着するデリー空港

デリー空港には夜中すぎ2時10分、定刻に到着した。ヨーロッパと日本の間にあって、インドはいつも発着が真夜中である。デリー空港では予想よりはスムーズに入国できた。税関では古いカメラを申告したら、申しわけ程度に年数をきいただけでパスできた。ロビーを出たところで、うるさくつきまとうポーターをおし分けて、Money



Ashok Hotel。料金はツインベッドルームを1人専有で1泊53米ドル ここでバンケットと展示会、ポスターセッションが行なわれた。

Exchangeの場所を捜した。National Bank of Indiaという看板のかかった西部劇の酒場のような銀行があった。品の良さそうもない男が2人座っているだけで、一人もお客がいないので、気味悪くなって両替するのはやめにした。Congress側の出迎えがあったので、皆がそろうまで、ほこりっぽい通路の横のイスに腰かけて、2時間余りも待つことにした。人々が出て来ないのは、空港内の銀行で両替するのに手間取ったためである。時刻は午前5時になろうとしていた。

旧式のタクシーAmbassadorにのせられておよそ30分、黄色いナトリウムランプのともる一級国道を車は走った。左側通行であった。英国と日本以外にも左側通行があったことに気がついた。ライトの光の輪の中に、ぬっと牛が現れた。白い牛であった。

Congress側我々を連れて行ったのは、比較的整然としたところに建つニューデリーでも屈指の洋式ホテルAshokであった。Congressを通して申し込んだ希望も何もあったものではない。要するに日本人は一人を除いて全員このホテルに入れられたのである。例外の一人とはCongressを通さなかった岡山大のM先生であった。大理石づくめのホテルであった。ロビーには、仏陀が灯明をかかげて立っていた。側には、噴水があった。

はじめて手にしたルピー札は、油紙のように変色して、異臭が鼻をついた。

3月3日、レセプション会場ローディーガーデン入口で我々を迎える踊り子達。手にもっているのは歓迎用の花びら。

●ホテルの生水口にせず

ホテルの洗面所の水を手ですくってみた。澄み切ったきれいな水であった。とうてい毒水とは思えなかった。思い切って顔を洗い、シャワーを浴びた。夜が明けはじめた午前6時、ようやくベッドに横になった。

昼すぎ、レストランで一人で食事をした。トースト2枚、オレンジジュース、コーヒーで21ルピー（300円）であった。出された生水は口をつけないことにした。生水と生ものはタブーであった。洗面の水と歯みがきの水はさすがにホテルの水道水を使った。結果はこれが悪かった、と思う。S先生やK先生はホテルのお湯を使ったのである。

昼からS先生、日本板硝子のA所長と3人で会場を見に行った。歩道は緑が一杯の街路樹と花に囲まれて、季節は日本で言えば5月末なみの暖かさであった。ホテルのゲートを出たところにコブラ使いの老人が座っていた。オートリキシヤのたまり場を通った。外国人とみると、メーターを倒して声をかけてくる。言い値は20ルピー（300円）である。半分に値切ってみる。一応渋面をつくるが、乗せてくれる。インド人ならメーターを倒さない。基本料金は2.5ルピーである。これが分ったのはインド人と相乗りしたときである。

募金運動をよそおう乞食もいる。研究費を募る医科大学の教授と称する老人にだまされた。もっとも被害はたったの10ルピーであったが。

3月2日の登録は朝9時からホテルで行なうと発表されたが、午後2時からに変更された。予稿集とブリーフケースが全員に渡ったのはそれから丸一日後のこととなった。

ようやくプログラムが手に入った。日本を出るまではプログラムも割当時間も知らされていなかったのである。S先生はSpecial Lectureが開会式のすぐ後で同じ場所であると知らされていなかったのではないか。

●花びら敷きつめた会場入口

会場Vigyan Bhavanは堂々たる西洋風建築であった。ホール内を警察犬がかぎ回った後、大統領が入場し、2人の演奏者がジタールのような楽器と笛を演奏し、1人が国歌を歌った。これ異常明るくするとヒューズが飛ぶのではないかと思われる位照明を明るくした会場でSingh大統領がヒンディー語の演説を行なった。会場の入口には、本物の花びらが敷きつめてあった。

ガラス会議は3日から7日まで続いた。論文の数は、米国34、中国（台湾を含む）23、インド18、フランス16、日本10、ソ連9、ドイツ（東独3を含む）7、英国5、イタリア4、トルコ4、ルーマニア3、フィンランド2、オランダ2、メキシコ2、その他ポーランド、ブルガリア、スウェーデン、スペイン、ブラジル各1であった。出席者は主催者の発表ではインド180人、外国280人であった。しかし、講演のキャンセルが多かったのも事実である。特に中国のキャンセルが目立った。例えば、3月4日G会場、2:00～5:30p.m.の11の講演のうち5つがキャンセル、しかも1つは代読であった。予定よりも1時間も早く終わってしまった。まさかと思って1時間も早くきていた東工大のT君はあやうくキャンセルあつかいされずにすんだのである。

学生のT君、会議の後一人でインド旅行に出かけた。早々に下痢に悩まされたりして、身の上を案じたが、3週間後、無事帰国した。旅行先で新婚旅行中のインド人夫妻に誘われて居候していたのだそうである。

Weyl賞の受賞者のG.W.Scherer氏の高い鼻は印象的であったが、インドでは言葉を交すことはなかった。会議後、日本に立寄ったとき、京大の研

究室を案内した。これが縁になって、窯協誌第4回特集号のレビュー論文の依頼の手紙を書くことになり、結局引き受けてくれたのである。

●ヒンディー語の賛美歌を歌う

3月2日（日）の朝、K先生はホテルの案内嬢にしきりにものをきいていた。クリスチャンであるK先生は教会のあり場所をきいていたのである。私も一緒に連れて行ってもらうことにした。メソジスト教会では、英語の説教の時間が終り、ヒンディー語の説教の時間であった。2人で黙って座っていると牧師がやって来て、握手を求めた。説教が始まると牧師は我々のことを英語で皆に紹介した。賛美歌が始まると、近くの青年が本を広げて教えてくれた。ヒンディー読みのアルファベットが書かれていた。ヒンディー語の賛美歌を歌った。

3日夕刻のレセプションは貸切りのローディガーデンで開かれた。屋外パーティーである。

肉ダンゴ、ハンカチを意味するインド風モチ、羊焼肉などの屋台がならんだ。木立の間の広場では、人形劇、サーカス、彫り物実演、サル回し、クマ踊り、民族舞踊、アクロバットダンス、異民族舞踏、人間蛇、ジプシー女、回る仕かけ花火、などが同時進行した。チンドン屋が人々の間をねり回る。木の葉を丸めたチューインガムも売っている。みやげ物店ではサリーやネックレス屋が軒を並べた。

周囲にめぐらした柵の外にはただ見をしようとおし寄せた人々を見張っている銃をもった番人がおり、危険を冒してインドまでやって来たかいがあったと思った。

●象牙のシバ神を歯ブラシで洗う

ホテルにも土産物店が並んでいる。夜は9時頃まで客の呼び込みをやる。香木ビャクダンの彫刻を売る店がある。シバ神のすかし彫りを見たいと思った。若い店主は仏頂面をしていっこうに愛想がよくない。隣の店のオニイサンにたずねると彼は6ケ月前にチベットから来たばかりで英語がよく解らないのだと教えてくれた。

年2回は京都へ行くという日系人の象牙彫刻の店に入ってみた。シバ神のすかし彫りが気に入った。汚れはどうしてとるかときくと、歯ブラシでゴシゴシ洗って下さいと答えた。日本に帰って、そのことを思い出しておかしくなった。

本屋に入った。交歓図本があった。日本大使館員がおみやげに十冊もお買いになりましたと店の主人が言った。大使館も色んなことをするものだと感心した。

ツアーでは200キロ離れたアグラの町へ行った。タージマハールの町である。ザブトンを乾すように、固めた牛のフンを乾している集落を通過した。帰りは夜になった。暗いヘッドライトの光の中に無灯火で走る通勤者の自転車の列が浮かび上がる。バスは警笛を鳴らし続けて、追い抜いていく。街に入るとポツリ、ポツリと電灯がともっている。寝つかれぬままに人々が夕涼みをしているのが見える。それ以外は闇であった。

3月8日午後8時、大阪に着いた。インド旅行は終った。家につくなり、まず第一にしたことは、コップで生水を好きなだけ腹いっぱい飲むことであった。（完）

〔著者紹介〕

大田陸夫（おおた　りくお）

昭和39年京都大学工学部工業化学科卒業
昭和41年京都大学大学院修士課程終了
同年4月京都大学工学部助手
昭和54年京都大学工学部助教授
昭和61年4月京都工芸繊維大学工芸学部無機材料工学科教授